

クアトロ・ラガッツィ外伝：出会いと発見の騒動記

平岡隆二

熊本県立大学准教授

キリシタン時代に起こったさまざまな出来事のなかでも、1585年にローマ教皇に謁見した日本の少年使節については多くの人々が関心を寄せている。彼らはイエズス会東方布教の偉大な成果として、ポルトガル、スペイン、イタリアの諸都市で熱狂をもって迎えられ、それまで「未知の国」か、せいぜい「インド」の一部くらいとしか思われていなかった日本がヨーロッパで知られる大きなきっかけとなった。また帰国後の彼らが、イエズス会が日本で行ったさまざまな布教事業の当事者あるいは目撃者となったことも見逃すことができない。その前から日本では「南蛮文化」と呼ばれる新しい文化ジャンルが形成されつつあったが、彼らがヨーロッパから持ち帰った文物がその文化にさらなる彩りを加えたことは特筆に値する。この小稿では彼ら4少年の旅と、それが引き起こした発見と出会いの騒動を辿ることで、日本とヨーロッパという二つの文化の出会いの風景をスケッチしてみたい。

よく知られているように、4人の日本人少年をローマに派遣し、教皇に謁見させるという史上初の試みを企画・実施したのはイエズス会の巡察使アレッシンドロ・ヴァリニャーノ (Alessandro Valignano, 1539-1606) だった。広大な東洋地域での布教活動を統括・監督する指導者として1579年に初めて来日した彼は、西洋式教育の組織的導入や通信制度の整備、財源確保などの根本方針を打ち出し、そして1582年に日本を離れる直前に、この大胆な使節行を案出したと考えられている。

ヴァリニャーノによると、使節の目的は大きく二つあった。一つ目は、日本での布教の成果をカトリック世界に見せ、今後の活動に必要な支援を獲得することである。日本では教会や信徒の数が順調に増加していたが、財政的な基盤はなお脆弱で、支持者からの寄進も期待できる状況ではなかった。それゆえ布教の成果を分かりやすい形でヨーロッパの貴顕に示して彼らの心を動かし、物心両面での支援を獲得することは、日本教会の未来のために是非とも実現せねばならなかった。

二つ目は、彼ら日本の少年たちに、ローマをはじめとするカトリック世界を見聞させ、その様子を帰国後に日本人に向け語らせることだった。これは一見呑気で羨ましいミッションに思えるかもしれないが、第1のものと同じく重要な任務だった。ヴァリニャーノは、当時の日本人の多くが神父たちを「母国では貧しく身分も低い者で、そのため天国について説くことを口実に、日本で財をなすために来ている」と考えていることに、頭を悩ませていた。どうして遠い異国の僧侶が、「魂の救済」とやらのためにわざわざ日本までやってきて、縁もゆかりもない人々に犠牲の精神を発揮するというのか？ それにはきっと裏があるに違いない。少なからぬ日本人がそう思ったことは、福音伝道についての正確な情報がほとんどない当時であっては無理からぬことだった。この種の無理解を、神父たち自身の言葉で克服するには限界があった。そのためには日本人が自分の目でヨーロッパを見て、神父たちの来日の真の目的を知り、それを自分の口から同胞たちに報告しなければならなかった。そうして選ばれたのが、会に協力的な大名と親戚関係にあり、創設されたばかりのセミナリオで学んでいた4人の少年だったのである。

1582年2月に長崎を出発した時に12歳頃だった彼らは、マカオ、ゴア、喜望峰を経て、1584年8月に

リスボンに到着したときには15歳になっていた。地上最大の旅を敢行してやってきた「日本のシニョーリ（貴紳）」たちが、その後のヨーロッパ滞在中にどれほどの歓迎を受けたかについては、この短いエッセイでは到底書き尽くすことができない。その熱狂振りは、使節のことをタイトルページに掲げた出版物が、わずか9年間（1585-1593）に78種も刊行され、またその内の49種は1585年の1年間に刊行されたという事実が如実に物語っている²。

この旅の最初のハイライトは、マドリッドにおけるフェリペ2世（1527-1598, cat.35）との謁見だった。当時スペイン国王兼ポルトガル国王で、世界最大の領土を誇った王との謁見に、彼らは日本から持参した着物に袴、腰には大小の両刀といういで立ちで臨んだ。王は使節の4人だけでなくその随員らにも親しく抱擁するという異例の対応を見せた。とくに未知の国「日本」の衣装に興味津々で、正使の伊東マンショが脱いだ片方の草履を手にとって底を調べだし、周囲の人々を驚かせたという³。王は一行に特別旅券を発行するだけでなく多額の旅費まで与え、ローマへの道中の関係各所にも厚遇を命じるなど、破格の好意を示した。その背景には、地球の裏側から自らに恭順の意を示してきたという感激もあったろうが、アジアにおけるポルトガルのプレゼンスの正当性が、教皇から付与される布教保護権 Padroado によって保証されていたことは見逃すことができない。王にとって東方布教の成果を盛大に歓迎することは、ヴァチカンとの関係を維持・強化するための外交政策でもあったのだ。

その後、船でイタリアに上陸した一行は、ピサやフィレンツェを治めるトスカーナ大公フランチェスコ1世・デ・メディチ（1541-1587）にも手厚く遇された。とくに公妃ビアンカ・カッペッロ（1548-1587, cat.37）主催の夜会で、妃が伊東マンショをダンスのパートナーに指名したエピソードは有名である。『天正遣欧使節見聞対話録』によると、「その戦闘に出陣」したマンショは、「大胆に構えて勇気を鼓舞し、それを敢行した」⁴という。美女の誉れ高かったビアンカは、大公の元愛人で、先妻を追い出して公妃の座を手に入れた妖婦としても知られる。使節らが目の当たりにした絢爛たるルネサンス・カトリック世界の背景には、策謀や背徳が渦巻く現世の俗界があった。それをよく知るヴァリニャーノは、少年たちにヨーロッパの高貴で偉大なものだけを見せ、「悪しきものは絶対に見させてはならない」ばかりか、「外部の人たちと絶対に交際させないように」との指令まで出していた⁵。その任にあたった随行のイエズス会士の苦心たるや、いかばかりだったろう。

一行の旅は、最終目的地のローマでクライマックスを迎えた。1585年3月23日、教皇グレゴリウス13世（1502-1585, cat.38, 41）との謁見に向かう使節の行列は、ローマでも未曾有の出来事と言われ、沿道には彼らを一目見ようと人々が大挙した。当時の記録が彼らのことを「日本の王子殿」「インドの貴紳」「インドまたの名を日本の貴紳」「インドの王」⁶とさまざまな呼んでいることから、その狂騒ぶりがうかがえる。そのさまは「ローマはことごとく歓喜に沸き立つよう」⁷だったという。

異例尽くめの使節にふさわしく、謁見はヴァチカン宮殿の「帝王の間」における公式の枢機卿会によるもので、それは神聖ローマ皇帝などキリスト教国の君主かその名代の使節と同等の扱いだった。病欠の中浦ジュリアンを除く使節の3人が御前に進み出ると、教皇の眼は涙にあふれ、同じく感動の涙を流す臨席の枢

機卿らの前で、一人ずつに抱擁と接吻を与えたという。続いて披露されたイエズス会神父ガスパル・ゴンサウベスによるラテン語演説⁸の中で、教会は「イギリスという島を失ったが、それは今や日本という島で償われた」と高らかに宣言されたことは、この使節がローマでどのように受け止められたかを象徴的にあらわしている。古代の教皇グレゴリウス1世によってカトリックとなったイギリス諸島は、宗教改革の荒波の中で先年ローマから離脱したばかりだった。しかしその大きな損失は、当代の同名の教皇グレゴリウス13世の日本獲得によって、今ここに代償されたのである！その功労者で、対抗宗教改革の旗手でもあったイエズス会は、この謁見の直前に、他の修道会による日本布教を禁止する旨の教皇小勅書（つまり事実上の日本布教独占権）を得ることに成功していた。これはヴァリニャーノの代わりに使節団長をつとめたヌーノ・ロドリゲスが、ローマに先回りして行ったロビー活動の成果だった可能性が高い⁹。そうしたことは無論少年たちのあずかり知らぬことだったが、その時彼らはまさしく、失地回復をさらに推進したい教皇庁の思惑や、その名誉をめぐるカトリック内部での主導権争いという、巨大で複雑な渦の中心にいたのである¹⁰。

一行はローマ滞在中、ひっきりなしに訪れる各国の使者に引き合わされたり、聖俗さまざまの祝典へ出席させられたりしたので、心身ともに疲弊したようだ。当時の記録の一つは、彼らが「信じられないほどローマを喜んでいるが、それにもかかわらず日本に帰ることを切望している」¹¹と伝えるが、まことに信ずべき報告と見えよう。

彼らが、往路とほぼ同じルートを辿って最終的に長崎に帰着したのは1590年7月だった。足かけ8年5か月にわたる壮大な世界旅行を終えた少年たちは、今や20歳の青年になっていた。

帰国した使節団の持参品からは、ヨーロッパと日本の初めての出会いを象徴する文化的所産が数多く生み出された。その代表として、使節と同じ船で日本に到達したヨーロッパの活版印刷機と、それによって印刷された一連の書物を挙げるができる。印刷機は日本に向かう途中のインドのゴアではやくも稼働し、『原マルチノの演説』（1588年）を印刷した。これは使節の一人原マルチノがゴアで行ったラテン語演説を刊行したものである。さらにマカオまで運ばれた時には、有名な『天正遣欧使節見聞対話録』（1590年）（cat.44）を刊行した。これは帰国後の使節らがヨーロッパ旅行の詳細を日本人に語って聞かせるラテン語の対話録で、彼らの実体験を骨組みとするものの、実際はヴァリニャーノの創作——あるいは彼が少年らの口を使って語らせた腹話術的著作——であった。用意周到な巡察使は、カトリック世界の素晴らしさを日本人に証言させるという使節派遣の目的を、なんと彼らが帰国する前にすでに達成していたのである。同書は日本の神学校で学ぶ生徒たちの教科書としての役割も持っていた。アドリアーナ・ボスカロが言うように、使節たちは8年半の大冒険を達成するだけでは充分でなく、帰国後にもう一度「使節」として働いてもらわなければならなかったのだ¹²。

日本に到着した印刷機は休む暇もなく多くの書物を印刷し続けた。とくに語学の才に秀でた原マルチノは、神父になるための勉強のかたわら『こんてむつすむんち』（天草、1596年）『ぎやどべかどる』（長崎、

1599年)など、日本人にキリスト教を伝えるための書物の翻訳・出版に深く関わった。また『珠冠のまぬある(スピリツアル修行)』(長崎、1607年)(cat.46)は、文語体の日本文をローマ字で書き起こしたもので、日本人司祭と修道士のための黙想用修徳書として刊行されたものである。

印刷機は、宣教師たちが日本語を学習するための辞書や語学書の印刷にも利用された。1595年に天草で出版された『羅葡日対訳辞書』は、とくに説教の原稿作りに利用されたことから「説教のための辞書」と呼ばれた。口語体のローマ字に変換された日本の古典『平家物語』(天草、1592年)や、イソップ寓話の日本語訳『エソポのハブラス』(同、1593年)なども、説教用語の学習を段階的に進められるよう編纂・出版されたものである。辞書や語学書は、聴罪と説教がおもな仕事だった宣教師には必須のもので、手で書き写すための膨大な時間を節約するために印刷する必要があるがあった。そうした蓄積を集大成した『日葡辞書』(長崎、1603-04年)は、イエズス会による日本語研究の一つの頂点をなす辞書で、当時の日本語を保存したタイムカプセルとして、比類なき文化史的価値を有している。

布教を通じて西洋絵画とその技法が日本に輸入され、やがて国内で制作されるようになったことも見逃すことができない。キリストやマリアの姿を描いた聖画は、礼拝の対象であると同時に、キリスト教の教えを可視化して民衆に伝える上でも大きな効果を発揮した。聖画は日本では慢性的に不足しており、ルイス・フロイスは1584年にローマに送った書簡で、日本では5万枚の聖画が必要だと訴えたほどだった。印刷機はそうした需要に答えるべく、日本到着直後から銅版による聖画を大量に印刷したのである。

やがてセミナリオに画学会が設置され、イエズス会の画家ジョヴァンニ・ニコラオ(あるいはコーラ Giovanni Nicolao/Cola, 1560-1626)¹³の指導のもと、本格的な西洋絵画教育と制作が行われた。1593年の日本年報では、画学会は絵画と銅版画の二過程に分かれ、生徒のうち「83人が水彩画と油絵を、また5人が銅版画を修行」していて、油絵については「日本の使節たちがローマから持ってきた立派な画像数枚をそっくりそのまま写す者がおり、色も形も完璧」だったと報じている。日本司教として来日したペドロ・マルティンスは、その銅版画を「ヨーロッパ製の版画と区別できないほどのきばえ」と評したほどである¹⁴。聖画は礼拝に値する優美さを備える必要があり、おのずから洗練された高度な技術の移転を要請した。なかでも《セビアの聖母》(cat.49)は、1597年に有家のセミナリオで制作されたと確定できる貴重な作例である。ちなみに、この《セビアの聖母》の写しと分かる版画が、中国の墨匠・程大約による『程氏墨苑』(明・万暦年間1573-1620刊)に収録されている。これはイエズス会の中国布教に活躍したマテオ・リッチ(Matteo Ricci 利瑪竇、1552-1610)が1605年の末か1606年の初めに北京で程大約に贈った聖像の一つとされる¹⁵。セミナリオ制作の銅版画が、日本のみならず中国布教でも使用されたことを示す興味深い事例と言えよう。

セミナリオで描かれた肉筆画には、サインや落款を施すことがほとんどなかったようで、現存する作品のどれがそれにあたるのかを断定することは難しい。しかし美術史家たちは、すぐれた初期洋風画の多くが、その影響下で制作されたと考えている。とくに《救世主像》(cat.50)は、その卓越した洋風表現だけでなく、

画面下に「1597」という年代と、裏面に「Sacam. Jacobus」という記銘を付した稀有な作例である。先行研究では、中国人の父と日本人の母の間に生まれ、天草・志岐でジョヴァンニ・ニコラオに画業を学んだヤコブ丹羽(Jacobe Niva / Niwa 倪雅谷、字は一誠、1579-1638)の作と比定されている。興味深いことに、ヤコブは後に中国に派遣され、聖画制作によってリッチの中国布教を大いに助けた。今は失われたリッチの書簡によると、1605年に北京にいたヤコブは「自分の絵で中国の大多数の人びとを感嘆のうちに魅了し、かれの手になる絵に比肩しうるような絵は中国にはないと皆が認めるほどであった」という¹⁶。また『帝京景物略』(1635年初版)によると、北京の宣武門内の天主堂には「左手で天球儀¹⁷を支え、右手の人差し指であたかも説教しているかのよう」な見事なイエス像が掛けられていた。その図像は「救世主像」と明らかに類似するが、これもヤコブ丹羽の作だった可能性が指摘されている¹⁸。イエズス会の日本布教は、1614年に本格化した禁教令によってその命脈を事実上絶たれたが、同じ時期に、中国における布教地盤を固めることに成功していた。《セビリアの聖母》やヤコブ丹羽の存在は、ヨーロッパと日本と中国の三つをつなぐ結節点としても重要な意味を持っている。

最後に、21世紀を生きるわれわれにとって、彼ら4少年の旅とそれが生み出したさまざまな騒動の意義は、いったいどこにあるのだろうか？ それはたしかに日欧の相互理解 communicationの始まりを告げる記念すべき出来事だったが、同時に誤解 miscommunicationの始まりでもあった。使節の役割は、彼らがローマに近づくにつれ、当初の目的をはるかに超えるものに膨れ上がった。彼らは、ときにはカトリックの失地回復のシンボルとなり、ときには一行を歓迎することで教皇庁に取り入ろうという諸侯たちの思惑の対象ともなった。彼らに熱狂したカトリック世界は、ありのままの少年たちを見たのではなく、彼らの見たかった「未知の国・日本」を見たのである。イエズス会も、少年たちにありのままのヨーロッパを見せるのではなく、会にとって都合の悪いものは決して見せまいとした。もし少年たちがプロテスタント諸国も参考までに見聞したいと言い出したとしても(そんなことは当然あり得なかったが)、その願いが実現することはなかっただろう。彼らが帰国後に日本の同胞に向けて語った「ヨーロッパ」すら、彼らの思うように伝わったかどうかは保証の限りではなく、むしろ新たな誤解を生むことの方が多かったかもしれない。16世紀末において、洋を隔てた二つの文化の壁は、かように高く、また強固なものだった。

とはいえ、彼らの旅が日本とヨーロッパとの対話 conversationの出発点となったこともまた疑い得ない事実である。それは少なくとも、ヨーロッパ人の心の中で日本がインドから独立する大きなきっかけとなった。また日本においても、日欧の文化と技術が融合した南蛮の文物を生み出すのに大きな役割を果たした。使節とともに帰国した印刷機が出版した書物や辞書は、当時においては日欧の対話に欠かせない道具となり、現代においては、失われた過去の「日本」を研究するための貴重な情報源となっている。さまざまな思惑や策謀に満ちた使節ではあったが、対話の扉はこのとき確かに開かれたのである。

その対話の歩みは、禁教後もオランダ船や唐船が行き交う長崎を通じて引き継がれ、さらに激動の近代

化を経て、現代のわたしたちまでつながっている。使節らの見たヨーロッパや南蛮の文物にわたしたちが心魅かれるのは、わたしたちもまた彼らと同じく、文化の壁を越えようとする旅路の同伴者であるからに違いない。現代の世界は彼らの時代よりずいぶん速く、便利にはなった。しかしメディアが伝えるテロや紛争のニュースを見ていると、地球上のさまざまな文化や宗教を隔てる認識の壁は、ますます高く、強固になっているように見える。4少年の旅がわたしたちに訴えかけているのは、この新たな壁を乗り越えるための対話という、いつ終わるともされない冒険に出発するための覚悟と勇気なのかもしれない。

註

- 1 松田毅一『新装版 天正遣欧使節』朝文社、2001年(初版1965年)、63-64頁
- 2 アドリアーナ・ボスカロ(三浦葉子訳)『イタリアにおける1585年の使節』『SPAZIO』13-1、no. 27、1982年、25-49頁、とくに34頁。
- 3 松田前掲書、148頁
- 4 デ・サンテ著、泉井久之助ほか共訳『デ・サンテ天正遣欧使節記』雄松堂書店、1969年、361頁
- 5 松田前掲書、89-90頁
- 6 ボスカロ前掲論文、36頁
- 7 ルイス・フロイス原著、岡本良知訳註『九州三侯遣欧使節行記』東洋堂、1942年、343頁
- 8 東京大学史料編纂所編『天正遣欧使節関係史料I』(『大日本史料』第11編、別巻之1)、東京大学、1959年、248頁
- 9 大石一久『天正遣欧使節千々石ミゲル：鬼の子と呼ばれた男』長崎文献社、2015年、186-192頁
- 10 また、少年使節にまつわる出版物の刊行と、カトリック教皇庁の布教戦略との関係については、木崎孝嘉『天正遣欧使節パンフレットに見るカトリック教会の宣教戦略』『年報 地域文化研究』東京大学大学院総合文化研究科、第13号、2009年、1-21頁を参照のこと。
- 11 前掲東京大学史料編纂所編著、310頁
- 12 ボスカロ前掲論文、48頁
- 13 児嶋由枝は近年、ニコラオの名字にはコーラを採択すべきだと指摘している。児嶋由枝『日本二十六聖人記念館の「雪のサンタ・マリア」とシチリアの聖母像：キリシタン美術とトレント公会議後のイタリアにおける聖像崇拜』『イタリア学会誌』第65号、2015年、167-188頁
- 14 五野井隆史『キリシタンの文化』吉川弘文館、2012年、201-203頁
- 15 バスクワーレ・M・デア(柏木治訳)『中国キリスト教美術の起源(1583年~1640年)』(原著1939年)、内田慶一・柏木収編訳『東西文化の翻訳：「聖像画」における中国同化のみちすじ』関西大学出版部、2012年、72-83頁参照。
- 16 デリア前掲訳書、58頁
- 17 デリア前掲訳書、61頁では「地球儀」とするが、『帝京景物略』の原文「渾天圖」によって改めた。
- 18 デリア前掲訳書、61頁

クアトロ・ラガッツィ 桃山の夢とまぼろし
—— 杉本博司と天正少年使節が見たヨーロッパ

【展覧会】

企画・担当：
福満葉子（長崎県美術館学芸専門監）

学芸副担当：
松久保修平（長崎県美術館学芸員）

【展覧会図録】

2018年12月27日
初版第1刷発行

編集・構成：
福満葉子

執筆：
杉本博司
松原知生（西南学院大学教授）
平岡隆二（熊本県立大学准教授）
橋本麻里（ライター・エディター、永青文庫副館長）
片岡瑠美子（長崎純心大学長）
福満葉子
松久保修平
稲葉友汰（長崎県美術館学芸員）
伊藤晴子（長崎県文化観光国際部文化振興課係長/学芸員）

翻訳：
ジャイルズ・マリー
クリストファー・スティヴンズ

表紙デザイン：
下田理恵

デザイン：
町田淳（株式会社ピーエス・クリエイティブ）

印刷：
株式会社サンエムカラー

発行：
長崎県美術館
〒850-0862 長崎県長崎市出島町2-1
Tel: 095-833-2110

Quattro Ragazzi: Hopes and Illusions of the Momoyama Renaissance
— Europe through the Eyes of Hiroshi Sugimoto and the Tensho Embassy

Exhibition
Curated by:
Yoko Fukumitsu, Senior Curator, Nagasaki Prefectural Art Museum

Curatorial Assistance by:
Shuhei Matsukubo, Assistant Curator, Nagasaki Prefectural Art Museum

Catalogue
Date of Issue:
December 27, 2018

Edited by:
Yoko Fukumitsu

Texts:
Hiroshi Sugimoto
Tomoo Matsubara, Professor, Seinan Gakuin University
Ryuji Hiraoka, Associate Professor, Prefectural University of Kumamoto
Mari Hashimoto, Writer/Editor, Deputy Director of Eisei-Bunko Museum
Rumiko Kataoka, President, Nagasaki Junshin Catholic University
Yoko Fukumitsu
Shuhei Matsukubo
Yuta Inaba, Assistant Curator, Nagasaki Prefectural Art Museum
Haruko Ito, Senior Curator, Nagasaki Prefectural Government, Culture, Tourism
& International Affairs Department, Cultural Advancement Division

Translated by:
Giles Murray
Christopher Stephens

Cover Design:
Rie Shimoda

Page Layout:
Jun Machida, PS Creative, Co., Ltd

Printed by:
SunM Color Co., Ltd

Published by:
Nagasaki Prefectural Art Museum
Dejima-machi 2-1
Nagasaki-shi, 850-0862, Japan

All rights reserved.

Copyright © 2018 Nagasaki Prefectural Art Museum
Hiroshi Sugimoto's photographs and text copyright © Hiroshi Sugimoto, courtesy of Gallery Koyanagi

ISBN 978-4-909309-01-3 C0070

表紙：
杉本博司《パンテオン、ローマ》2015年 (cat.19)

Front cover:
Hiroshi Sugimoto, *Pantheon, Rome*, 2015 (cat.19)

裏表紙：
《南蛮渡来風俗図屏風》江戸時代（17世紀半ば）公益財団法人阪急文化財団 逸翁美術館 (cat.67)

Back cover:
Nanban Screen, Edo period (Mid-17th century), Hankyu Culture Foundation, Itsuo Art Museum, Ikeda, Osaka (cat.67)